

文天祥正氣歌

文天祥正氣歌

《原文》

《読み下し文》

天地有正氣	雜然賦流形	天地に正氣有り 雜然として流形を賦さる
下則爲河嶽	上則爲日星	下りては則ち河嶽 <small>かがく</small> と爲り 上りては則ち日星 <small>にっせい</small> と爲る
於人曰浩然	沛乎塞蒼冥	人に於ては浩然 <small>こうぜん</small> と曰い 沛乎 <small>はいこ</small> として蒼冥 <small>そうめい</small> に塞つ
皇路當清夷	含和吐明庭	皇路 <small>こうろ</small> 、清く夷 <small>おさ</small> まれるに当たりては 和を含みて明庭 <small>めいてい</small> に吐く
時窮節乃見	一一垂汗青	時窮まれば節乃ち顕れ 一一汗青 <small>かんせい</small> に垂る
在齊太史簡	在晉董狐筆	齊に在りては太史の簡 晉に在りては董狐 <small>とうこ</small> の筆 註1、註2
在秦張良椎	在漢蘇武節	秦に在りては張良 <small>ちやうりやう</small> の椎 漢に在りては蘇武 <small>そぶ</small> の節 註3、註4
爲嚴將軍頭	爲嵇侍中血	嚴將軍 <small>げんしやうぐん</small> の頭と爲り 嵇侍中 <small>けいじちゆう</small> の血と爲る 註5、註6
爲張睢陽齒	爲顏常山舌	張睢陽 <small>ちやうすいやう</small> の齒と爲り 顏常山 <small>がんじやうざん</small> の舌と爲る 註7、註8
或爲遼東帽	清操厲冰雪	或いは遼東の帽と爲り 清き操は冰雪よりも厲 <small>きび</small> し 註9
或爲出師表	鬼神泣壯烈	或いは出師 <small>すいし</small> の表と爲り 鬼神も壯烈に泣く 註10
或爲渡江楫	慷慨吞胡羯	或いは江を渡る楫 <small>かじ</small> と爲り 慷慨胡羯 <small>こうがいこかつ</small> を呑む 註11
或爲擊賊笏	逆豎頭破裂	或いは賊を撃つ笏 <small>こつ</small> と爲り 逆豎 <small>ぎやくじゆ</small> の頭破れ裂かる 註12
是氣所磅礴	凜烈萬古存	是の氣の磅礴 <small>ぼうはく</small> する所 凜烈 <small>りんれつ</small> として萬古に存す
當其貫日月	生死安足論	其の日月を貫くに當りては 生死 <small>いざく</small> 安んぞ論ずるに足らん
地維賴以立	天柱賴以尊	地の維 <small>つな</small> は賴 <small>よ</small> って以って立ち 天柱は賴 <small>よ</small> って以って尊し

三綱實係命	道義爲之根	三綱実 ^{まこと} に命 ^{いのち} に係 ^か り	道義 ^{だうぎ} 之 ^の が根 ^ね と爲 ^な る
嗟予邁陽九	隸也實不力	嗟 ^{ああ} 、予 ^よ は陽 ^{やう} 九 ^{きゆう} に邁 ^あ い	隸 ^{れい} なり実 ^{まこと} に力 ^{ちから} あらず
楚囚纓其冠	傳車送窮北	楚 ^そ 囚 ^{しゆう} 其 ^{その} の冠 ^{かん} を纓 ^{むす} び	傳 ^{でん} 車 ^{しや} 窮 ^{きゆう} 北 ^{ぺい} に送 ^{おく} らる
鼎鑊甘如飴	求之不可得	鼎 ^{てい} 鑊 ^{かく} 甘 ^{あま} きこと飴 ^い の如 ^{ごと} きも	之 ^の を求 ^{もと} めて得 ^え 可 ^か からず
陰房闐鬼火	春院闕天黑	陰 ^{くら} 房 ^{ぼう} に鬼 ^{おに} 火 ^か は闐 ^{しづ} かに	春 ^{はる} の院 ^{いん} は天 ^{てん} を闕 ^{とぎ} して黒 ^{くろ} し
牛驥同一皂	鷄棲鳳凰食	牛 ^{うし} と驥 ^き 一 ^{いつ} つのおけ ^{おけ} を同 ^{どう} じうし	鷄 ^{すまか} の棲 ^{すま} に鳳 ^{ほう} 凰 ^{おう} 食 ^く らう
一朝蒙霧露	分作溝中瘠	一朝 ^{いつしやう} 、霧 ^{きり} と露 ^{つゆ} に濛 ^{おほ} さるれば	分 ^{あま} んじて溝 ^{みぞ} 中 ^{ちゆう} の瘠 ^{せき} と作 ^な らん
如此再寒暑	百沴自辟易	此 ^{かく} の如 ^{ごと} くして寒 ^{かん} 暑 ^{しよ} を再 ^{また} びす	百 ^{ひゃく} の沴 ^{れい} 自 ^{みづか} ら辟 ^へ 易 ^{えき} す
嗟哉沮洳場	爲我安樂國	嗟 ^{ああ} 哉 ^あ 沮 ^{しよ} 洳 ^{じよ} の場 ^{ばう}	我 ^{わが} が安 ^{あん} 樂 ^{らく} の國 ^{こく} と爲 ^な る
豈有他繆巧	陰陽不能賊	豈 ^{いかで} に他 ^た に繆 ^{たぐみ} なる巧 ^{たくみ} 有 ^あ らんや	陰 ^{いん} 陽 ^{やう} も賊 ^{そく} なう能 ^{あた} わず
顧此耿耿在	仰視浮雲白	顧 ^{かへり} れば此 ^{こゝ} の耿 ^{こう} 耿 ^{こう} として在 ^あ り	仰 ^{あが} いで浮 ^う 雲 ^{うん} の白 ^{しろ} きを視 ^み る
悠悠我心悲	蒼天曷有極	悠 ^{ゆう} 悠 ^{ゆう} として我 ^{わが} が心 ^{こゝろ} は悲 ^{かな} しきも	蒼 ^{せい} 天 ^{てん} 曷 ^{いづく} んぞ極 ^{ごく} まり有 ^あ らん
哲人日已遠	典刑在夙昔	哲 ^{てん} 人 ^{じん} は日 ^ひ に已 ^い に遠 ^{とほ} きも	典 ^{てん} 刑 ^{けい} は夙 ^{しゆく} 昔 ^{せき} に在 ^あ り
風簷展書讀	古道照顏色	風 ^{ふう} 簷 ^{えん} に書 ^{しよ} を展 ^{ひら} げて読 ^よ めば	古 ^こ 道 ^{だう} 顔 ^{げん} 色 ^{しき} を照 ^あ らす

《和 訳 文》

この宇宙には森羅万象の根本たる気があり、本来その場に応じてさまざまな形をとる。それは地に下っては大河や高山となり、天に上っては太陽や星となる。人の中であっては、正気が発揮される場合は（孟子の言うところの）「浩然」と呼ばれ、見る見る広がって（沛乎として）天地（蒼溟）いっぱい満（塞）ちる。政治の大道（皇路）が清く平らかな（清夷）とき、それは穏やかで（含和）立派な朝廷とな

り、

時代が行き詰ると正気を元とした節義が世に現れ、一つひとつ歴史（汗青）に記される。

例えば、齊にあっては崔杼の弑逆を記した太史の簡、晋にあっては趙盾を指弾した董狐の筆
秦にあっては始皇帝に投げつけられた張良の椎、漢にあっては19年間握り続けられた蘇武
の節

断たれようとしても屈しなかった巖顔の頭、皇帝を守ってその衣を染めた嵇紹の血
食いしばり続けて砕け散った張巡の齒、切り取られても罵り続けた顔杲卿の舌
ある時は遼東に隠れた管寧の帽子となって、その清い貞節は氷雪よりも巖（厲）しく
ある時は諸葛亮の奉じた出師の表となり、鬼神もその壮烈さに涙を流す
またある時は北伐に向かう祖逖の船の舵となって、その気概は胡を飲み
更にある時は賊の額を打つ段秀実の笏となり、裏切り者（逆）の青二才（豎）の頭は破れ
裂けた

この正気の満ち溢れる（磅礴）ところ、厳しく（凜烈）永遠に存在し続ける
それが天高く日と月を貫くとき、生死などどうして問題にできよう
地を保つ綱は正気のおかげで立ち、天を支える柱も正気力でそびえている
君臣・親子・夫婦の関係（三綱）も正気その本命に係わっており、道義も正気その根底
となる

ああ、私は天下災いのとき（陽九）に遭い、陛下の奴僕たる（隸也）に努力が足りず
かの鍾儀（楚囚）のように衣冠を正したまま、馭伝の車（傳車）で北の果て（窮北）に送ら
れてきた

釜茹での刑（鼎鑊）も飴のように甘いことと、願ったものの叶えられず
日の入らぬ牢（陰房）に鬼火がひっそりと（闐）燃え、春の中庭も空が暗く閉ざされる
牛と名馬（驥）が飼い馬桶（皂）を共にし、鶏の巢で食事をしている鳳凰のような私
ある朝湿気にあてられ、どぶに転がる瘦せた屍になるだろう
そう思いつつ2年（再寒暑）も経った、病（百沴）もおのずと避けてしまったのだ
ああ！なんと言うことだ、このぬかるみ（沮洳場）が私にとっての極楽になるとは
何かうまい工夫（繆巧）をしたわけでもないのに、陰陽の変化も私を損なうことができない
のだ

何故かと振り返ってみれば、私の中に正気が煌々と光り輝いているからだ、そして仰げば見
える浮かぶ雲の白さよ

茫漠とした私の心の悲しみの限りなき（悠々）こと、この青空に果てがないかのようだ
賢人のいた時代はすでに遠い昔だが、その人の事蹟は太古から伝わる
風の吹き入る軒（簷）に書を広げて読めば、古人の道は私の顔を照らす

註1：「在齊太史簡」

中国春秋時代の齊に仕えた崔杼（さいちよ）は、恵公・靈公・莊公・景公の四代にわたって専権を揮った政治家である。恵公に仕えて寵を得、若くして重用されるが、恵公の死後に齊の卿（大臣格の貴族）である高氏と国氏にそれまでの専横を憎まれ、衛に亡命する。

しかし、恵公の孫の靈公の時代に齊に復歸し、国氏を失脚させて再び権力を掌握した。靈公の病が重くなると、別の公子を担ぐ重臣を殺害して、靈公が辺境に配流していた公子・光を王位に就け莊公とした。ところが、その莊公が崔杼の後妻と密通したことが知れ、怒った崔杼は莊公を殺した。崔杼は、家庭内で前妻の子と後妻の連れ子とが対立するなど家内を治められず、一族は相闘して全滅し、一人残された崔杼は自害した。

崔杼（さいちよ）がその君主を殺した際に太史（記録係）が「崔杼、その君を弑す。」と書いたため、怒った崔杼に殺された。しかし太史の弟が同じ事を書き、また殺され、更にその弟が同じ事を書くに至って、崔杼も記述を止めさせる事をあきらめた。

この故事から、「在齊太史簡」とは、「君臣順逆の道を直筆して、毫もその節を曲げて権貴に阿ねることがない」ことを言うようになったものである。

ちなみに、「太史」とは、古代中国の官名。天文・暦法、また、国の記録をつかさどった史官のことであり、「簡」は、文字を記す竹の札で、また、それに記した記録のことを言う。

『春秋左氏伝』襄公二十五年の記録に、次のように書かれている。

「太史書曰、崔杼弑其君。崔子殺之。其弟嗣書、而死者二人。其弟又書、乃舍之。南史氏聞太史盡死 執簡以往 聞既書矣 乃還」

（太史が『崔杼、其の君を弑す』と事実を史書に書いたので、崔杼はこれを殺した。後をついだ太史の弟も同じことを書いたので、二人目も殺された。しかし彼らの弟はまた同じことを書き、とうとうこれを舍(ゆる)した。太史兄弟が殺されたことを聞いた別の史官は『崔杼其の君を弑す』と書いた竹簡を持って駆けつけたが、すでに事実が記録されたと聞いて帰った)

註2：「在晉董狐筆」

紀元前7世紀のころ、古代中国の春秋時代、晋国の名宰相・趙盾（チョウトン）は、暗君・靈公と佞臣・屠岸賈にたびたび暗殺されかけたので、国外の脱出しようと国境まで来たとき、趙盾の弟の趙穿（チョウセン）がたまりかねて靈公を暗殺した。

これを聞いて急いで引き返した趙盾は靈公の葬儀を執り行い新しい国公を立てたが、趙穿を討とうとはしなかった。その趙盾を太史（歴史官）の董狐（トウコ）が激しく糾弾する。史書（竹簡）に「趙盾、その君を弑する」と大書し、廟堂に掲げた。趙盾は「主君を殺したのは弟の穿であって私ではない」と抗議し、訂正を求めた。ところが董狐は一步も退かない。「あなたは宰相であり、事件のときに国内にいた。しかも犯人である弟を処罰していない。

よって霊公を弑したのはあなたに他ならない」と。趙盾はやむなく引き下がり、記述はそのままになった。

すなわち、董狐は、趙盾があらかじめ霊公をいさめるということがなく、しかも君主を殺害した趙穿を討つということもなかったのも、その罪は趙盾にこそあると書いたのである。

上記の事件は「春秋左氏伝」の「宣公二年」に載っていて、「在晋董狐筆」はこの故事に由来し、「権力の圧力に屈せず、また権勢にこびへつらうことなく、歴史的事実を正しく記述すること」を意味する熟語になったものである。

註3：「在秦張良椎」

張良（チョウリョウ）は、秦末期から前漢初期の政治家・軍師。祖父と父が韓の相国（大臣）を務めるなど、張家は韓の名族でした。隣国の秦の勢力が増大し、韓を圧迫するようになり、父の張平が死んでから20年経った韓王安九年（紀元前230年）、秦軍10万の攻撃を受け韓王・安は捕虜となり、韓は滅亡した。

その時にはまだ張良は年若く、官に就いていなかった。韓の滅亡とともに張良は庶民に身を落とした。祖国を滅ぼされた張良は韓のため復讐を誓い、殺された弟の葬式も出さず、全財産を売り払って秦王に仇を報ずる客士を求めた。他の何よりもこの目的を優先するため、弟の葬式の費用すら惜しんだ、という逸話としても残っている。

しかし、相手は大国の覇者であり、一人で暗殺を成功させるのは難しいため、同志を求めて諸国を旅した。旅の途中で倉海君という人物に出会い、その人物と話し合っって屈強な勇士（力士）を借り受けた。始皇帝は諸国を巡行して回っていたので、巡行の途中で博浪沙（ハクロウサ、現在の河南省鄭州の東北）を通った所を狙い、重さ120斤（約30kg）という鉄槌を投げつけ、始皇帝が乗った車を潰す計画であった。しかし鉄槌は副車に当たってしまったので暗殺は失敗に終わり、張良たちは逃亡した。

始皇帝は自らを暗殺しようとした者に怒り、全国に触れを回して捕らえようとした。そこで張良は偽名を使って下邳（カヒ。現在の江蘇省徐州市の東の邳州市）に逃れ、この追究をやり過ごした。

その下邳の潜伏時代に、黄石公（オウセキコウ）という老人に会い、太公望が記した兵法書を授けられた。張良は潜伏期にこの兵奉書を始め多くの書物を学び、軍師としての能力を磨いたのであろう、後に漢帝国を建国した劉邦に仕え、軍師として常に的確な戦略を立てて劉邦に助言を与え、その勢力拡大に尽くした。その一環として、劉邦とともに韓を滅ぼした秦を滅亡させた。

張良と蕭何と韓信とを「漢の3傑」、張良と諸葛孔明と呂尚（太公望）を「中国史の3大軍師」と言うなど、軍師として活躍したのである。

(長くなるので省略するが、「鴻門の会」「四面楚歌」といった古来有名な故事にも張良は関係している。講談社学術文庫「中国の歴史3」を参照)

註4：「在漢蘇武節」

前漢の蘇武(ソブ)、字は子卿といった。漢の武帝の時(紀元前100年)に、天子より賜った印である節(セツ)を携えて、北方の異民族である匈奴へ使者として赴いた。匈奴の王である単于(ゼンウ)は、蘇武を帰順させようとしたが拒否されたため、これを捕らえて大きな穴に幽閉し、飲食を与えなかった。やがて雪が降った。蘇武は、穴の中で臥しながら雪を噛み、節の飾りについてある毛をむしって飲み込んで生きながらえていた。

附：節について

唐王朝の歴代皇帝は領土の拡大につとめ、突厥などの周辺民族を支配し、7世紀には西は中央アジア、東は朝鮮、南はベトナム(安南)にまで領土を広げた。7世紀末、第3代皇帝高宗の時代に唐の領土は最大となった。

しかし、これだけの広大な領土を支配するのに、自国民の徴兵だけではとうていまかななかった。そこで考え出されたのが、夷をもって夷を制するとも言うべき政策だった。つまり、征服した諸民族を傭兵として金で雇い、国境警備に当たらせることにしたのである。その金で雇った傭兵をまとめる長官が、「節度使」である。

「節度使」の名称は、この職を受ける際に、朝廷から「旌節」(せいせつ、使者のしるしとして使者が持参する旗印で、唐牛(ヤク)の尾を旗につけたもの)を与えられ、管轄する地域の軍政を節制することができた、という意味である。

数日たっても死ななかったのを不思議に思った匈奴は、蘇武を北海(今のバイカル湖)のほとりに移して、牡羊を飼わせた。「この牡羊が子を産んで乳を出したら、お前を漢土へ帰してやる」と無理難題をいう。蘇武は、天子の印である節を手放さず、これで杖着くように体を支えながら、牡羊を飼っていた。野鼠の穴を掘り、草の実を食うなど辛酸をなめ、節の先の飾り毛もほとんど抜けてしまった。

蘇武が匈奴に捕らえられた翌年に、李陵が使者として匈奴に入り(後述の「平家物語」では、李陵の方が先に匈奴に入っている)やはり帰還を許されなかった。李陵は単于に降り、その女を娶り、身なりも胡服を着用し、匈奴風の鬘まで結って匈奴人となった。右校王という地位も得、単于に優遇された。ある時、蘇武とかつて共に侍中を務めた仲であった李陵が降伏するよう説得しにきたが、蘇武は応じなかった。それからというもの、李陵は陰ながら蘇武を援助し続けた。「漢書」巻54は、李陵と蘇武を一つの列伝にまとめ、李陵が匈奴に捕らえられて降ったことを、恥ずべき行為とし、匈奴に屈しなかった蘇武の信義を高く評価している。

匈奴は漢に対して蘇武の生死を伏せていた。漢の武帝が亡くなり、そのあとを受け継いだ昭帝の時、偶然に捕らえられた一羽の雁の脚に、蘇武が生存していることを記した帛書（絹糸を織り込んだ生地）が結びつけられていた。そして、昭帝が匈奴と和親し使節を派遣した時に、ようやく単于から帰国の許可が出た。

「平家物語」巻第二の最後に「蘇武」の章があり、李陵も蘇武も「使者」ではなく、匈奴に侵攻する漢軍の大將軍となっていて、いずれも漢軍が亡ぼされたうえ生け捕られた、となっています。また、昭帝が上林苑に遊んでいたとき、一羽の雁が下降してきて翅に結びつけられた帛を食い切って落としました。これを拾って見れば蘇武が書で、「胡狄の地に捕らえられているが、たとえ死んでもその魂は帝のお側に戻り仕えよう」とあった。さてこそと、漢は大軍を以て匈奴を攻め、これに勝利した。するとこれを耳にした蘇武が荒野の中から這い出てきて、「是こそ古の蘇武よ」と名乗った。19年の星霜を送って、片脚は切られながら、輿に担がれて故国に戻ることができた。どうやって隠し持っていたのか、「節」を持ち帰ったのであった。

註5：「爲嚴將軍頭」

魏の曹操が西涼（現在の甘粛省・寧夏回族自治区）の馬超を亡ぼした。その東にある関中（現在の陝西省南部の関中市）の太守・張魯（チョウロ）は、曹操は次には関中に攻め込んでくると考え、それより先に南下して益州（蜀、現在の四川省）の劉璋（リュウショウ）を攻めてしまおうとしていた。

張魯が挙兵して益州を攻略しようとしているとの情報に、劉璋は荊州（現在の湖北省一帯）の劉備を蜀に迎え入れ、加勢させることにした。招請に応じて、建安16年（211）冬、劉備は5万の軍勢を率いて蜀に向かった。

劉璋は劉備を歓待し、親交を深めるとともにすっかり信頼するようになっていった。そのうちに、曹操が劉備と同盟を結んでいる呉の孫権を攻撃し、孫権が救援を求めているとの知らせが来た。劉備は諸葛孔明（ショカツコウメイ）らに託してきた荊州に戻ることにし、劉璋に援軍と食糧の提供を依頼したが、劉璋の陣営の中には、劉備はいずれ蜀を奪い取るに違いないとして強硬に反対する勢力も多く、形ばかりの支援しか提供しなかった。

劉璋の不実な態度を口実に、劉備はかねてからの方針通り劉璋を襲撃することに決した。しかし、劉璋軍の地元の利を活かした頑強な抵抗に遭って苦戦する中、劉璋を見限って劉備に臣従し、軍師として働いていた龐統（ホウトウ）が死んだ。劉備からその知らせを受けた諸葛孔明は、荊州の首尾を関羽（カンウ）に託し、張飛（チョウヒ）を伴って自ら1万5千の軍勢を率いて蜀に出発した。

このとき巴郡(現在の四川省重慶市北部)の守備をしていたのが嚴顔(ゲンガン)だった。「高齡ではあるが強弓を引き、太刀を使い、万夫不当の勇者」で、城郭に依拠して、攻め寄せる張飛の軍勢に降伏しなかった。

ところが、張飛の策に裏をかかれて捕らえられてしまった。捕虜になったのだから自分に跪けと言う張飛に対し、「お前達は無道にも、我が州郡を侵略した。我が州に断頭將軍(首を刎ねられる將軍)はいても、降伏する將軍はいない。早く首を斬れ」と堂々と言い放った。張飛は腹を立て左右の者に斬れと命じたところ、嚴顔はさらに「匹夫め、さっさと斬れ。なにを怒ることがあるものか」と一喝した。張飛は嚴顔の顔色一つ変えない様を見て感嘆し、嚴顔の縄を自ら解き、篤くもてなしたといわれている。このため嚴顔も張飛の温情に感じ入り、降伏して以後は劉備の家臣となった。(「三国志演義」講談社学術文庫)

註6：「爲嵇侍中血」

三国志の3英傑の一人曹操が220年正月に66歳で亡くなった。その後を継いだ嫡男曹丕(ソウヒ)は、同年10月に魏皇帝・献帝から帝位の『禪讓』を受け、その後は曹叅(明帝)、曹芳(ソウホウ)、曹髦(ソウボウ)、曹奐(ソウカン、元帝)と一族に魏帝位は受け継がれた。この間に、曹操の参謀として立て続けに功績を挙げ、勢力を蓄えたのが司馬懿(シバイ)であった。司馬懿の長男・司馬師、次男・司馬昭と受け継ぎ、司馬氏のこの系統が魏の政治を完全に掌握するまでになった。

司馬昭の死後は嫡男の司馬炎が継いで晋王・相国となり、265年12月には魏の五代皇帝曹奐(元帝)から『禪讓』を受けて即位し、年号を泰始と改めた。魏は5代45年で滅亡して晋(西晋)に替わったのである。

280年に呉を滅ぼして三国時代を終焉させ、後漢末期以降分裂していた中国を100年振りに再統一した。国号は単に晋だが、建康(現在の南京市)に遷都した後の政權(東晋)に対して西晋と呼ばれる。

(なお、ここまでに『禪讓』が2回あった。「禪讓」は先代が自発的に退位し、次代に譲り渡したというのが本来の意味合いであるが、この2回とも実態はそうではなく、有無を言わず譲り渡すよう強制された挙げ句なのである。)

晋初代皇帝・司馬炎(武帝)は、天下統一を成し遂げたことに安心し、次第に政務を蔑ろにして酒色に溺れるようになり、皇后の父である楊駿(ヨウシュン)が代わって政務を取り仕切るようになった。武帝が290年に崩御し、皇太子司馬衷(恵帝)が第2代皇帝として即位した。この皇太子は暗愚で知られた人物であったので、楊駿の権勢がさらに強大になった。しかし、楊駿は朝政で失政を連発し、多くの忠臣の諫めにも耳を貸さなかったため、内

外から怨嗟の声が集まるようになった。

惠帝の賈皇后が楊氏の専横を憎み、291年に汝南王司馬亮（司馬懿の3子）・楚王司馬瑋（同6子）を仲間に引き入れて楊駿を殺害した。さらに司馬亮は聡明で人望もあったため、賈皇后は次第に疎みだして司馬瑋を扇動して司馬亮を殺させ、その罪を全て司馬瑋に負わせて彼も殺害し、こうして結託したはずの2人も殺害して実権を掌握した。彼女は残虐で嫉妬心が強く権謀を好み、さらには身重の側室を嫉妬心から胎児ごと手に掛けた事すらあったと記されている。

西晋全土で賈皇后の専横に対する反発が生まれ、300年4月に司馬倫（趙王、司馬懿の9男）は司馬冏（シバケイ、齊王・司馬炎の甥）と語らって賈皇后とその一派を殺して首都の洛陽を制圧し、301年1月に惠帝に禅譲を強要して、自ら皇位に就いた。

しかし、司馬倫の皇位篡奪は諸王の反発を招き、また朝政が乱れに乱れたので、301年に司馬冏・司馬穎（シバエイ、成都王・司馬炎の19子）・司馬顥（シバギョウ、河間王）により殺害された。惠帝が復位したが、これ以後、皇族同士による血を血で洗う争い（八王の乱）が続き国内は荒廃した。

表向きは皇帝の擁護を旗印にした皇族の挙兵→皇族による旧執政者打倒と権力掌握→新執政者になった皇族の権力の私物化とそれに対する批判（「輿論」）→「輿論」を大義名分に掲げた新たな皇族の挙兵という悪循環が繰り返され続けたのである。

ずいぶんと前置きが長くなりましたが、そろそろ本題にはいります。司馬倫を倒した3王のうち先ず司馬冏が権力を握り、司馬乂（シバガイ、司馬炎の17子）がこれを倒し、次には司馬穎が司馬乂を討滅した。その司馬穎が失脚すると司馬顥が実権を握り、東海王司馬越がこれに対峙した。

嵇紹（ケイショウ）は魏王朝の重臣の嫡男として253年に生まれた。父が讒言により処刑されたため自宅謹慎の身となり、任官したのは21歳のときであった。

301年1月、司馬倫が惠帝を廃して帝位を篡奪すると、嵇紹は侍中（皇帝の側近として身边に侍する役職）に任じられた。4月、上述したとおり司馬倫が誅殺されて惠帝が復位を果たし、嵇紹は引き続き侍中を任された。その後、司馬倫→司馬冏→司馬乂→司馬穎が順次朝権を掌握したが、その間、嵇紹は免官、任官を繰り返した。

304年7月、東海王司馬越が司馬穎に反旗を翻し、惠帝を伴って司馬穎の本拠地へ侵攻を開始した。司馬越に召喚された嵇紹は侍中としてこれに同行した。その皇帝軍が進軍中、司馬穎軍に奇襲され大敗を喫した。この時、随行していた官人たちは恐ろしさに皆四散して

しまい、恵帝を護ろうとする者は誰もいなかった。ただ一人嵇紹だけは馬を下りて乗輿に乗り込むと、身を挺して恵帝を庇ったのである。

敵兵が襲い掛かり、嵇紹は乗輿から引きずり出された。すると恵帝は「忠臣である。殺してはならん」と叫んだが、敵兵はその命を無視して、嵇紹を射殺してしまった。その時、血が飛び散り、その飛沫で恵帝の服が汚れた。そして、恵帝が無事な所まで逃げた後で、側近が血の付いた服を洗おうとしたが、恵帝は「これは嵇侍中の血である。拭き取ってはならん！」と声を荒げたという。恵帝は身を挺して庇ってくれた嵇紹の死を目の当たりにして深く哀しみ嘆いたのであった。

(「三国志演義4」講談社学術文庫、「中国の歴史4」講談社学術文庫、ウィキペディア)

註7：「爲張睢陽齒」

(1) 安史の乱

唐王朝の歴代皇帝は領土の拡大につとめ、突厥などの周辺民族を支配し、7世紀には西は中央アジア、東は朝鮮、南はベトナム（安南）にまで領土を広げた。7世紀末、第3代皇帝高宗の時代に唐の領土は最大となった。

しかし、これだけの広大な領土を支配するのに、自国民の徴兵だけではとうていまかなえなかった。そこで考え出されたのが、夷をもって夷を制するとも言うべき政策だった。つまり、征服した諸民族を傭兵として金で雇い、国境警備に当たらせることにしたのである。その金で雇った傭兵をまとめる長官が、「節度使」である。

第6代玄宗皇帝は辺境10カ所に節度使を置き、各節度使には中央政権からほぼ独立した行政権と軍事力を与え、周辺諸民族へのならみをきかせた。

「節度使」の名称は、この職を受ける際に、朝廷から「旌節」（せいせつ、使者のしるしとして使者が持参する旗印で、唐牛（ヤク）の尾を旗につけたもの）を与えられ、管轄する地域の軍政を節制することができた、という意味である。

その節度使である安祿山が反乱を起こし、唐王朝を存亡の危機に落しめた。註7に述べる「張巡」（チョウジュン）と註8に述べる「顔杲卿」（ガンコウケイ）の物語は、この「安祿山の乱」（「安史の乱」というのが普通なので、以下では「安史の乱」という。「安史」は首謀者である安祿山の「安」と、その盟友史思明の「史」をとったものである。）を舞台とするものなので、先に安史の乱について触れておきたい。

安祿山は西域のサマルカンド出身で、ソグド人と突厥の混血でもあった。ずる賢く、残忍で、機転が効き、人に取り入るのに巧みであり、胡族の間に育ったので6つの蕃語に堪能であったため、貿易関係の業務で唐王朝に仕えて頭角を現した。（『旧唐書』、『資治通鑑』でも、

随所にその狡猾さ、残忍さ、忘恩を罵る言葉で満ちている。)

宰相の李林甫に近付き、玄宗から信任され、さらに玄宗の寵妃の楊貴妃に取り入ること
で、范陽をはじめとする北方の辺境地域（現在の河北省と北京市周辺）の三つの節度使を兼
任するにいたった。

李林甫の死後、宰相となった楊国忠（楊貴妃の又従兄）との対立が深刻化し、その身に
危険が迫ると、天宝14年（755年）11月、玄宗より逆賊の楊国忠を討てとの密使を受
けたと称して、安禄山はついに挙兵した。当時、安禄山は唐の国軍の内のかなりの割合の兵
力（親衛隊8000騎、蕃漢10万～15万の軍団）を玄宗から委ねられていた。

唐政府軍は平和に慣れきっていたことから、全く役に立たず、安禄山軍は挙兵からわず
か1カ月で、唐の副都というべき洛陽を陥落させた。翌年正月、安禄山は大燕聖武皇帝を名
乗り燕国の建国を宣言した。

しかし、756年春に行われた雍丘の戦いにおいて安禄山側の令狐潮（レイコチョウ）率い
る反乱軍は圧倒的な兵力を擁していたにもかかわらず、張巡の正規軍に敗れた。背後を襲わ
れる危険があるため、中国南部に侵出することができなくなってしまい、反乱計画は一時頓
挫してしまった。



唐は同年6月、蕃将の哥舒翰（カジョカン）に命じ潼関（都である長安から直線で120
kmにあり、長安を守るための最重要な関所）から東に出撃させたが、哥舒翰は安禄山軍に
敗北する。パニックに陥った唐朝廷は、楊国忠の進言により、同6月13日、長安を脱出し、

玄宗は蜀（現在の四川省）へと敗走する。

その途上の馬嵬（バカイ、現在の陝西省咸陽市興平市）で兵士たちの疲労と餓えは限界に達し、護衛の兵が反乱を起こした。楊国忠は安禄山の挙兵を招いた責任者としてまず血祭りにあげられ、さらに兵らは、皇帝を惑わせた楊貴妃もまた楊国忠と同罪であるとしてその殺害を要求し、やむなく玄宗の意を受けた高力士（コウリキシ）によって楊貴妃は絞殺された。（唐の運命を変えた絶世の美女の最後はこのように哀れなものであり、「馬嵬駅の悲劇」と言われる）

一方、長安を奪った安禄山であるが、間もなく病に倒れ失明し、次第に凶暴化。さらに、皇太子として立てた養子の安慶緒の廃太子を公然と口にするようになると、安慶緒及び側近らの反発を買い、安禄山は757年正月に安慶緒に暗殺された。

皇太子李亨（リコウ、玄宗の3男）が玄宗を上皇におしあげ、帝位についた。肅宗（シュクソウ）である。肅宗は、ウイグルの兵を借りて、9月に20万の軍勢で攻撃し、15ヶ月ぶりに長安を奪回した。

しかし、その後も安禄山の盟友・史思明が台頭し、寄せ集め部隊の東軍を破って、洛陽に進出し、大燕皇帝を名乗った。その史思明も安禄山と同じく、息子の史朝義に殺された。

762年に肅宗に替わって代宗が即位して、唐側に反攻の機運が盛り上がり、ついに763年、史朝義追い詰め、自殺させた。こうして足かけ9年に及ぶ安史の乱が収束したのである。

（2）爲張睢陽齒

張巡は唐代の武将。天宝15載（756年）安禄山が反乱を起こすと、張巡は兵を集めて安禄山側の令狐潮（レイコチャウ）の本拠である雍丘（ヨウキウ）を攻め、これを打ち破った。しかし、雍丘を奪い返すべく、令狐潮は数万の兵を率いて城下に來攻した。張巡の兵は千余に過ぎなかったが、対陣60余日、合戦すること300余戦に及んだ。

757年正月に安慶緒（安禄山の養子）が安禄山を殺し、尹子奇（インシキ）に睢陽（スイヨウ）を攻めさせた。睢陽太守の許遠に援軍を求められた張巡は、睢陽に入り一手となった。許遠は上官であったが、張巡の実力を認め、主将の位置を譲る。

睢陽城には1年分の蓄えがあったが、4月から10月にかけて賊軍に囲まれ、食料に困窮した。当時、睢陽の近くにいた官軍の諸将は、日和見をするものばかりで、救援するものは無かった。そこで、臨淮（リンワイ）に駐屯していた御史大夫の賀蘭進明に援軍を頼むが、賀蘭進明は敗北することと友軍に背後を襲われることを恐れ、また、張巡の名声を妬み、援軍を断った。

籠城軍の窮迫はその極に達し、多くの士卒が餓死するに至った。茶、紙、馬までも食べ尽くし、雀を網にかけ、鼠を掘って食べた。とうとう鎧や弩を煮て食べるに至った。靖献威言巻の4に、『巡、愛妾を出だしていわはく、「諸君、年を経食に乏しくして、忠義少しも衰へず。吾肌を割きて以て衆に啖はしめざるを恨む。なんぞ一妾を惜しみて坐ながら士の飢ゆるを視んや」と。乃ち殺して以て大饗す。』とあるように、張巡はその愛妾を殺して、兵に食わせた。賊が城壁を越えて襲ったとき、誰も立ち上がって防ぐことができなかった。

ついに、睢陽は落城に至り、張巡は捕らえられ、幹部らは捕らわれて処刑された。賊将尹子奇が張巡に、「聞くところによると、足下は、督戦するごとに大声にて下知し、そのたびに皆（まなじり）裂けて顔に血を流し、齒を嚙んでみな砕いたというが、それが何として生け捕りにされたのか」と問うと、「我が志にては逆賊を呑んでいたものの、力足らぬためにそれを為し得なかったのみである」と張巡が言う。

これを聞くと、尹子奇は怒って刀で張巡の口を抉ってみたところ、齒はわずかに3、4本を残しているだけであった。張巡はさらに罵って言う、「拙者は君父のために死するのであって何ら恥ずるところはないが、汝は賊に従ったのであるから、犬や豚といわねばならぬ。必ず天罰が降るであろう」。

かくして張巡は殺された。援軍の張鎬が到着したのは、落城の3日後だった。だが、睢陽城の頑強な抵抗が唐軍の別働隊の行動を容易としたために、落城10日にして賊軍の大部分は敗亡し、尹子奇も殺された。

張巡はその身長七尺余、志向気象は高く秀でており、困窮に苦しむものが頼って来ると、自らの財産の底をはたいてこれを救済し、俗人権勢家に阿ねることがなかった。その政治の態度は、重要な問題のみを取り上げて、枝葉をやかましく言い立てることがなかったので、官僚からの評判も良かった、という顔杲卿（ガンコウケイ）は唐の官吏で、その性質は剛直で、才幹もあった。安祿山に認められて常山太守となったが、その常山は河北の中央部、幽州から洛陽への通路の中間にある交通の要所であり、安祿山の管轄内であった。安祿山が杲卿を相当に信頼していたことを示している。

註8：「爲顔常山舌」

天宝14載（755）、安祿山が唐に反乱を起し洛陽に攻め上がったとき、顔杲卿が討賊の兵を挙げた。この時、従弟である平原太守顔真卿（ガンシンケイ）から、共に安祿山の本拠・范陽への路を遮断してその背後を脅かし、西進の勢いを弱めようと連絡してきた。そこで、謀略を以て賊将等をつらえ、敵を追い散らすと、これが河北地方における安祿山軍への最初の抵抗だったので、河北24郡のうち17郡がその日のうちに朝廷に帰順したのであった。

安祿山から常山攻略を命令された配下の将で盟友の史思明等が常山に攻め寄せてくる。顔杲卿が兵を起してからまだわずかに8日のことだったので、守備の態勢が十分でなかったため、また、隣郡の守将からの応援も無かったため、昼夜の防戦も空しく、常山は落城した。

顔杲卿は洛陽の安祿山のもとに護送された。安祿山に太守にとりたてたことへの背任をなじられる。しかし、顔杲卿は「汝はもと営州の羊飼いをしていた夷である。汝が拔擢され、三道の節度使に任命されたことは無比の恩寵といわねばならない。その天子の恩寵を受けながら謀反するこそ何事ぞ！吾が禄位は唐のものである。汝の奏請によるものとはいえ、汝に同調しなければならない道理は無い。早く殺せ！」と痛烈に面罵した。

怒った安祿山によってなぶり殺しにされたのであるが、賊を罵り続けたため、舌を切り取られたとされる。65歳であった。顔杲卿の親族も全て殺され、河北の諸郡は安祿山側に奪い返された。

顔真卿は、王羲之と並ぶ能書家としても有名である。王羲之（オオギシ）以来の優雅で繊細な筆運びに対して、骨太でドッシリした筆運びに特徴がある。その顔真卿は安祿山反乱決起の時、平原郡の太守であった。顔杲卿の従弟で、顔杲卿が処刑された後、河北の反安祿山勢力の中心として、安祿山軍と戦っていくことになります。

註9：「或爲遼東帽 清操厲冰雪」

この項の主人公は管寧（カンネイ）である。管寧は、中国後漢末期から三国時代の学者。173年、管寧は16歳のとき父を亡くした。父方・母方の親戚は彼が孤児で貧しいのに同情して、皆で一緒に香典を送ったが、すべて辞退して受け取らず、財産相応の野辺の送りをすませた。彼は身長が8尺（せき）あり、ひげと眉が美しかった。

平原の華歆（カキン）や同じ県の邴原（ハイゲン）とは友人で、ともに異郷（遼東郡）に留学した。時の人は、3人を合わせて「一龍」と呼んだ。華歆が龍の頭、邴原が腹、管寧が尾とされた。

中国大陸では、分裂が長ければ必ず統一され、統一が長ければ必ず分裂する、これを繰り返してきた。周末、七国（斉・楚・秦・燕・韓・魏・趙）に分かれて争ったが、すべて秦に併合され、秦の滅亡後、楚と漢に分かれて争ったが、これまた漢に統一された。（「三国志演義」冒頭の文）

その後、漢は王莽により中断されたが、再興され、前後併せて400余年（前漢200年、後漢200年）続いた。が、後漢末期は「黄巾の乱」（「太平道」という宗教の信徒による反

乱で、信徒たちが黄色い頭巾を被っていたので、この名がある)をはじめ、全国的に反乱が続発し、動乱の世となり、そして魏・呉・蜀が相まみえる三国時代となった。

後漢の末期の187年、天下が大混乱に陥ると、遼東郡(現在の遼寧省の一部・遼東半島)太守の公孫度(コウソンタク)の威令が国外まで行き渡っていると聞き、管寧は邴原や平原の王烈(オオレッツ)らと遼東へ赴く。やがて天下が安定してきたので、北海郡を離れていた人々はみな郷里に帰還する。ただ管寧だけは落ち着き払い、遼東で一生を送るかのような様子を見せていた。

223年、曹丕(ソウヒ、魏の文帝)が高官に詔を下し、特に行いの優れた人物を推挙せよと命ずる。その際、司徒の華歆が管寧を推薦したため、曹丕は彼を招いた。その後、曹丕の詔によって太中大夫(たいちゅうたいふ)に任ぜられたが、固持して受けなかった。

曹叡(ソウエイ、魏の明帝)が帝位を継ぐと、華歆はその官位を管寧に譲り、明帝は管寧を招いた。安車(老人用の座席のある安定した車)・共の役人・敷物・道中の食事を用意する等手厚い待遇をするよう郡に命じた。しかし、老いと病気を理由に辞退し続けた。

管寧の日常は、「黒い帽子、木綿の肌着と袴を身に付け、時節に応じ単衣と袷を着替え、家庭の出入りには杖を頼りとして歩き、人の助けをかりる必要はない」、「また、住居は川から七、八十歩離れているが、夏季□には水中に入って手足を洗い、果樹・野菜畑を眺めやる」と報告されている。

また、241年には、「今、管寧の旧病はすでに癒え、行年80歳ではあるが、精神は衰え鈍ってはいない。住居は狭い屋敷にみすぼらしい門で、むさくるしい街に憩い、粥を食べて口すぎをし、それも毎日とはとらない。」とも報告されている。

(三国志2魏書第11巻管寧伝・邴原伝、第7巻公孫度伝)

註10：「或爲出師表 鬼神泣壯烈」

「出師の表」(すいしのひょう)とは、臣下が出陣する際に君主に奉る文書のことである。「出師表」自体は一般的な文書名であるが、歴史上、三国時代蜀の丞相であった諸葛亮が、建興5年(227年)、皇帝劉禪(リュウゼン)に奏上したものが有名であり、特に述べられない場合、「出師表」とはこれを指す。

建興6年(228年)、諸葛亮は劉禪に再び「出師表」を上奏したとされている。この時の文章は、先の「出師表」と区別して「後出師表」と呼ばれている。しかし、この文章は『三国志』の本文では言及されておらず、歴史的事実と相違する点が多く、真偽不明の文書とされる。

諸葛亮の「諸葛」は姓、「亮」は名である。「諸葛孔明」と呼ぶ場合の「孔明」は字（あざな）であり、字で呼ぶのはその人に敬意を表する意味合いを持つことになる。従って、歴史を記述する場合には、諸葛亮とするのが適当であるので、以下には諸葛亮とする。

諸葛亮については、「三国志」「三国志演義」で誰もが知っているであろう。漢室の後裔である劉備玄德の「三顧の礼」に応じてその軍師となり、漢王朝の再興を宿願とする劉備を補佐して、縦横無尽の働きをしてきた。蜀の章武3年（223）劉備が病で亡くなった後は、その遺勅を守って、その子・劉禪に仕え、漢室の興復を己の任とした。

蜀の南方の蛮族を平定し背後を突かれる憂いを無くすと、諸軍を率いて北伐（魏討滅への遠征）に出発した。その出発に臨み、国に残す若い皇帝劉禪を心配して書いたというのが「出師表」であり、内容は次の通りである。「先帝の遺志を紹ぎ、先帝の遺徳を追いたまえ」というに尽きる。

まず、現在天下が魏・呉・蜀に分れており、そのうち蜀は疲弊していることを指摘する。そういった苦境にもかかわらず、蜀漢という国が持ちこたえているのは、人材の力であるということを述べ、皇帝の劉禪に、人材を大事にするように言う。

さらに、郭攸之（カクキュウシ）・費禕（ヒイ）・董允（トウイン）・向寵（ショウチョウ）といった面々の名をあげ、彼らはよき人材であるから、大事にしなくてはならないと言い、あわせて後漢の衰退の原因は、立派な人材を用いず、くだらない人間を用いていたからだとも指摘する。

最後に、自分が単なる処士に過ぎなかったのに、先帝である劉備が3回も訪れて自分を登用してくれたことにとっても感謝していると述べ、この先帝の恩に報いるために、自分は中原に進出し、逆賊たる魏王朝を破り、漢王朝を復興させようとしているという決意を述べ、全文を次のように結ぶ。

臣不勝受恩感激 今当遠離臨 表涕泣不知所云

（臣は聖恩を受け、感激の至りに堪へ難し。然るに今は御前を辞して遠く御別れ致すこととなり、此表を上るに臨み、覺えず落涙仕り、何を申上ぐるべきかも分り申さず。）

註11：「或爲渡江楫 慷慨吞胡羯」

魏・呉・蜀による三国時代の混乱は、265年に司馬炎が魏帝（元帝）から帝位を禪譲されて晋（西晋）を起こした後も続き、終熄したのは280年呉が亡んで天下統一が成ったときである。その司馬炎が290年に崩御したが、それを契機として、すでに註6で記述したように、西晋王朝内の皇位継承争いが始まり、「八王の乱」など中国史上稀に見る大混乱の時代となった。

八王の乱が終わる頃には、中央の威令に服さない諸勢力が各地に割拠し、西晋は惨憺たる状況になっていった。すでに後漢から三国時代にかけて北方の諸民族（胡）が南下し、この頃には、華北の山西には「匈奴（きょうど）」と「羯（けつ）」が、河北・山西北部には「鮮卑（せんび）」が、陝西・甘粛には「氐（てい）」と「姜（きょう）」が居住するようになっていた。これらを「五胡」という。

304年、匈奴の大単于（ぜんう）である劉淵（リュウエン）が南下し始め、その後を継いだ劉聡が劉曜と石勒（セキロク）を遣わして洛陽を攻め西晋の懷帝を捕らえた（永嘉の乱）。洛陽は焼き払われ、何万もの人の命が失われ、懷帝も匈奴の根拠地へと拉致された。さらに長安の都を落として愍帝をも捕らえて西晋を亡ぼした。318年に劉聡が没したあとの国内の内乱を、劉曜と石勒が鎮定し、劉曜は長安に都をおいて国号を「趙」（前趙）とした。

石勒は、羯族の族長の子として生まれたが、20歳の頃、山西の地を襲った飢饉の際に略取され、山東へ奴隷として売られた。のちに奴隷達と語らって逃げ、群盗に身を投じてその首領となり、その勢力を強めていった。劉淵による匈奴の反乱に際して、時局を読み、その配下を率いて協力し、劉淵の有力な部将となった。ライバルの劉曜が趙を建国すると、石勒も対立するように「後趙」を建て、徐々に西進し、329年には劉曜を捕らえて前趙を滅ぼし、山東から甘粛東部などにまで及ぶ華北の大部分を征し強盛な国家を築いた。また、西域の僧の仏図澄を厚遇して仏教の伝播に貢献した。死後は子の石弘が継いだが甥の石虎が篡奪した。

祖逖（ソテキ）は、范陽郡遼県（現在の河北省保定市）の人。代々將軍を勤める家柄だったが、父が早くに死去したため兄に育てられた。若い頃は闊達だったが読書嫌い、礼儀知らずの問題児で兄を悩ませたという。だが義を重んじ、身分に関係なく人付き合いがよく民衆からは慕われた。学問をようやく始めたのは青年に達してからだったという。

西晋時代に陽平（司州に属する郡、現在の河北省南東部と山東省西部にまたがる地域）に移り住み司州主簿となった。「永嘉の乱」で劉曜・石勒らの漢（後の前趙）の軍の攻撃で洛陽が陥落すると淮泗（現在の安徽省）に落ち延びた。

当時の琅邪王として江南にいた司馬睿に召し出されて軍諮祭酒に任命されて重臣となった。後に「西晋」が劉曜の攻撃により完全に滅亡し、司馬睿が元帝として即位して江南に「東晋」が成立すると、祖逖は五胡に荒らされる中原恢復のために自らを將軍位に任命して軍を与えて北伐を許可するように元帝に上奏した。

元帝は上奏に応じて奮威將軍・豫州刺史に任命したが、北伐の意志は無かったので2000人分の布と兵糧を与えただけで武器を与えず、兵は自らで集めるように命じた。祖逖は自ら義勇兵2000人を集め、勇躍して北伐を開始したが、長江を渡った際に、その中

流において楫を壊して、「我、中原を平定できぬうちは、再びこの長江を渡りはせぬぞ」と述べて部下を感嘆させたという。その意気盛んなこと、すでに敵を敗北させる勢いであった。

註12：「或爲擊賊笏 逆豎頭破裂」

唐の軍制は「府兵制」といい、兵は農民から徴兵して「折衝府」と呼ばれる部署に集めた。年間3ヶ月の軍事訓練や、3年間の辺境任務などが農民の大きな負担となり、兵役拒否、兵の逃亡などが多く、この制度は崩壊の瀬戸際にあった。

このため、辺境防衛のために専門の兵士を擁する「節度使」が置かれるようになり、710年の河西節度使を初めとして10の節度使が設置された。節度使は駐屯軍の将軍とその地方の財政官を兼ね、任地の税収を軍の糧秣と兵士の雇用に使う仕組みである。募兵制で、兵士は辺境で屯田を行い、国家から給料として絹と銅銭を支給された。

「安史の乱」は平定されたというものの、その後遺症で社会経済は混乱し、行政・徴税機能もマヒ状態にあり、中央権力の弱体化は覆うべくもなかった。そうした中での地方統治には、民政・軍事の両権をあわせ持ち、臨機応変に対処する必要があったので、唐は安史の乱後に、国内全域に節度使を配置した。唐末までには4、50を数えたといわれ、唐中央は首都長安・副都洛陽の周辺部のごく限られた一部を直轄支配するに過ぎなくなった。「藩鎮」であり、地方が中央を動かし中央を規制する状況を「藩鎮体制」と呼ぶ。

藩鎮には唐中央の統制に服する藩鎮と、中央から遊離して割拠する傾向が強い独立・反中央の藩鎮とがあった。

唐の税制度は、土地は公のもの、これを民に均等に配分して耕作利用させ（「均田制」）、民はその見返りとして収穫物の一部と労務を公（国家）に納める（「租庸調制」）という考え方に基づくシステムであった。

すでにそれ以前から潜行していた民衆の逃亡・流動が、玄宗の治政になって激しくなり、税収入の減に対し、辺境防衛の軍事費の増大、官僚機構の肥大化のため、国家財政は慢性的な赤字になっていた。この税財政システムが破綻に瀕していることは明らかであった。

そこで、人を単位とした従来の税制を改め、「両税法」によって土地の広さに応じて課税し、銭納を原則とし、安定収入が得られる税制に変えた。両税法では、定められた対象（税目）と税額内で課税することとなっているため、藩鎮側が勝手に徴税枠を広げることが難しくなっていた。また、藩鎮が領内からの税収のうち中央政府へ上納する分を一括していたのを、管内の州、県が別々に上納することとしたので、藩鎮の影響力をその直轄州に狭めることができた。

玄宗→肅宗→代宗と引き継がれた皇位を継いだ徳宗は、両税法により藩鎮の恣意的な財政運営に制限を加え、藩鎮の抑圧に乗り出した。徳宗の強硬姿勢を見た藩鎮は自らの地位を失うことを恐れ、官軍に与していた藩鎮のなかにも離反するものが出てきた。互いに連合して唐朝への反抗を鮮明にし、781年から6年間にわたり、華北・華中を戦乱に巻き込み内乱は拡大した。

李希烈（リキレット）は、遼西（北京市）の人で、安史の乱に際し、一兵士から淮西節度使李忠臣に従って戦功を立て、やがて李忠臣を追出して節度使となった。両税法による徴税の中央集権化に反対して、魏博、成徳、平盧の強大な3藩鎮が反乱を起すと、初め討伐に向ったが、反乱側に通じた。

その李希烈が襄城に侵攻した。朝廷は詔を発して涇原（けいげん）藩鎮等の兵を動員して救援に向かわせた。涇原節度使姚令言の率いる部隊が長安を通りかかったところ、朝廷からねぎらいの食事が出されたが、粗末な黒米の飯と菜餅だけだったので、兵士達が激昂して長安城内に乱入した。徳宗はたまらず逃げ出した。兵たちは太尉の朱泚（シュセイ）を首領に担ぎ上げた。

その朱泚というのは、当初は唐の盧龍軍節度使であったが、後に長安に仕えた。弟の朱滔が造反したために長安に留められたことから反感を抱き、上述したように徳宗が長安から避難すると、主だった者を呼び出して、己の天子即位を審議させた。

司農卿（農務大臣）の段秀実（だんしゅうじ）は朱泚を殺して徳宗を迎え入れようとしていたが、それを見かねた朱泚は段秀実を引き入れた。その審議の席上で、段秀実が「凶賊、吾汝を斬る萬段ならざるを恨む。豈に汝に従ひて反せんや」と、朱泚の顔に唾を吐きかけて罵り、笏（しやく）を振り上げて朱泚の額を激しく打ったので、額の真ん中が割れ血が流れた。朱泚は赦そうとしたが、段秀実は護兵に殺された。朱泚は大秦皇帝と名乗った。（「十八史略」）

註8で紹介した顔真卿（げんしんけい）が、淮西節度使李希烈を説得すべく来たのはこの時である。彼は李希烈のいかなる脅しにも屈せず、唐臣としての節義を全うし、剛直の士たる名を歴史上に残した。